

慶明戦「球場で校歌聴く傘寿の春」

——令和元年5月19日

有 満 修

(法学部昭和35年卒)

* はじめに

歩いて吞んで書く——一定年後、母校明治の級友二人（上澤博、平山松司）と、こんな散策を楽しんでいます。歩いて吞むだけでは、楽しすぎます。ですから、ボケ防止のために書きます。当然ながらの駄文です。そんな中から、昨年5月、神宮球場に慶明戦の観戦に行ったときに書いたものを送ります。

今年は、コロナ禍でリーグ戦もまだ開催されていませんが、社会が全般的にこの新型コロナウイルスを克服して、賑やかな応援合戦のもと、選手たちがファイト満々で頑張る試合を観戦できる日が早くきてほしいものです。

* 駅で会った慶應OBと和やかに

今日の慶明戦は、春季リーグ戦の優勝を左右する勝点3どうしの対戦である。快晴。8時すぎに家を出る。大江戸線国立競技場駅に着く。

改札を出る前にトイレに立ち寄ったら、出て来るステッキをもった老紳士とすれ違った。まだ早いのか、人影はまばら。改札を出て地上行きのエレベーターの方向に歩いて行ったら、先ほどの老紳士が前を歩いている。ブラウンの綿ズボンに紺のジャケットは当方とほぼ同じ。帽子（ハット）の色が向こうは薄茶、こちらは紺。追い越してエレベーター〔上〕を押す。扉が開いたので、年上のようにだったから、手で先にどうぞとやったら、向こうがどうぞ、と。それで先に乗った。2人きりである。

エレベーターが動き出したら、声をかけられた。

「野球ですか」

「そうです」

「どっちですか」

「明治です」

「明治は強いですね」

「慶應ですね」

「そうです」

「このところ、慶應が強くて、明治は負けています」。

「リーグ戦に詳しい友人がいまして、誘われて来たのですよ」

「私も、明治の友人たちと待ち合わせています」

「そうですね」

エレベーターに乗り合わせた人とこんな話をしたことはない。でも、今日は自然な会話である。慶明戦の同志だと思われているのだろうか、何の違和感もない。

エレベーターを出たら

「私はね、歩くのが大変なものだから、いつもここからタクシーに乗るのですよ」

ステッキを持っているから、そうだと思う。

「そうですか、私は歩きますので…」

と別れようとしたら、タイミングよくタクシーが来て

「あなたも乗りませんか。一緒に行けばいいじゃないですか」

むげに断るのも社交性に欠けると思って

「そうですか」

と言わざるを得なかった。二人で乗り込んだ。

「昨日も明治は強かった。よく負けるから慶應野球部は明治にコンプレックスを持っているといわれているのですよ」

「そんなことはないでしょうけど、慶応は高校も強い。甲子園にも近年よく出ますね」

「私は高校も慶應なんですよ」

「根っからの慶應ボーイだったわけですね」

「これまで甲子園に行ったことがなかったものだから、昨年、慶應が出場したときに行ってきました」

「私も一度行きたいものだと思っているのですが、母校の応援で行かれたのは最高ですね」

「彦根東に1回戦で負けました。彦根東の増居投手にやられた。ところが、その増居投手が慶應に入ってきているのですよ。1年生ながら、もう投げている。昨日もリリーフ（3番手）で投げた」

昨日の敵は今日の味方、うれしそうである。

「そんなエピソードのある1年生ですか。昨日はパソコンでみていたのですが、将来が楽しみです」

当方がタクシー代の心配をしないように、乗ったらすぐ千円札を運転手の横のトレーに出している。タクシーが停まったので、

「慶明戦のよしみで、お言葉に甘えます」

「もちろんです」

と笑顔で満足そう。新緑の神宮球場である。慶應が三塁側。タクシーを降りても、歩きながら話は続いた。

「昨日は高橋祐樹（4年・川越東）が投げて負けた。エースで負けたのですよ」

「明治もエースの森下（４年・大分商）が投げましたから、両校とも、今日は先発投手が鍵になりそうですね」

慶應は、今日も負けたら、勝ち点を失う。気がかりのようだ。

「８０歳代とお見受けしますが、お互いに高齢ながら、母校の観戦は楽しいですよ」と言えば、力強く

「そうです。早慶戦にも、よく来ます」

「いつまでも母校の応援がてら神宮に遊びに来られなきゃいけませんね」

「そうそう、おっしゃるとおりです」

と意気投合の会話が続いた。三塁側内野席入口の前に来た。慶應応援団の学生たちの姿がある。

「私は、バックネット裏の入口で待ち合わせていますので…本当に有難うございました」と帽子をとってお礼。お互いに満面の笑みで別れた。

「薫風に慶應 OB と意気合って」

多分、かつて会社の役員だったのだろう。そんなにおいがした。社交的なわきまえというものを感ずる。相手もそう思って気を許し合えたのかもしれない。

今日の慶明戦は、こうして始まった。

* 竹田投手が満塁ホームラン

１０：００集合だが、早めに揃ってバックネット裏に入る。よい席に着けた。試合は、明治・竹田祐（２年・履正社）と慶應・佐藤宏樹（３年・大館鳳鳴）の投げ合いで始まった。明治は２回裏に早くも満塁のチャンス、打者は９番ピッチャー竹田。打撃面でピッチャーに多くを望まないが、１点でも先制点を、と誰もが思ったに違いない。ところが、竹田の打球はレフトスタンドに飛んで行った。なんと慶應の度肝を抜くホームランである。一挙４点。途中でピンチもあったが、勝利の女神は明治に微笑んだ。最後は６→４→３のゲッツー、虎の子４点を守り抜いた。

* 天ぷら屋で勝利の美酒

さあ、祝杯。今日は天ぷら屋で呑もうと約束していたので、学生席から勝利の校歌が聞こえる中を新宿の天ぷら屋「銀座ハゲ天」に電話。３０分後に着くからと予約。慶應に二連勝して限りなく優勝へ進んだ。

神宮球場を出て銀座線外苑前に急ぐ。赤坂見附で丸の内線に乗り換えて新宿３丁目で降りる。「銀座ハゲ天」伊勢丹会館店（０３－３３５２－０３２５）に。窓側の落ち着く席を用意してあった。この席なら、酒を呑んで声が少々大きくなっても構わない。

上澤が言うには「明法戦（５．２５～２６）と早慶戦（６・１～２）が残っているが

明治が明法戦で一勝すれば、早慶戦で慶應が二勝しても、明治が勝率で上回る」。そうになると、エースの森下が好調だから、見通しは明るい。

慶明戦は4シーズンも苦杯をなめていたから、勝利の美酒に笑顔がこぼれる。この酒は、天ぷらに合うといわれている「菊正宗」である。我々3人は、いわゆるグルメではないが、酒にはうるさい方かもしれない。

今朝会った慶應の先輩も、友人たちとどこかに立ち寄っているかな、ふとそう思った。

* 神宮球場には爽快感が

振り返ると、3人揃って慶明戦の観戦を始めたのは、平成29年（2017）春季リーグからである。その日、明治は3-5で負けた（5.14（日））。

その時、思った。

神宮球場にやって来ること自体に爽快感がある。気持ちが若返る。だから、負けても、さほど問題ではない。60年来の親しい級友と一緒に、80歳にしてリーグ戦をバックネット裏で観戦できるとは、考えてもみないことだった。健康であってこそだ。

そんな価値観なのである。我が「野球の神様」には、重々感謝だ。

「球場で校歌聴く傘寿の春」…

ひらめいたが、字余りである。俳句は見かけこそ簡単だけれども、勘どころを外さないように活写する、それに字余り字足らずに気を配らなくてはならない難しさがある。若い時に本腰を入れればよかったと後悔している。

さて、その後も神宮で観戦した29年秋、30年春、秋は、負けた。四連敗である。「我々が来るといつも負けるから、もう慶應戦は止めて、ほかの試合にしようか」と上澤が言い始める始末。やはり母校が勝たないと面白くない。

ところが、今シーズンは慶應に二連勝して、優勝がみえるところまできた。

* 野球談義——難しい三連覇

ここ数年の順位を列挙してみる。

平成28（2016）春	明大・立大・法大・慶大・早大・東大
〃	秋 明大・慶大・早大・立大・法大・東大
平成29（2017）春	立大・慶大・法大・早大・明大・東大
〃	秋 慶大・明大・法大・立大・早大・東大
平成30（2018）春	慶大・立大・明大・早大・法大・東大

〃 秋 法大・早大・慶大・明大・立大・東大
令和 元（2019）春 明大・慶大・早大・立大・法大・東大

平成29年（2017）秋、30年春と明治を倒した慶應は二連覇を遂げ、30年秋も慶明戦に勝ったものだから三連覇なるかと注目されたが、早慶戦に敗れて慶應ファンの期待には応えられなかった。

三連覇は、なかなか難しい。雑誌「大学野球」2019春号をめくったら、最近では、早稲田が平成18年（2007）秋から三連覇している。そのころの早稲田は甲子園の優勝投手・斎藤祐樹（早実）を擁している。

斎藤投手は甲子園の決勝戦で駒大苫小牧の田中将大（楽天→ニューヨーク・ヤンキース）と投げ合った。37年ぶりの決勝引分け再試合となり、激闘の末、投げ勝ったのが斎藤祐樹だった。マウンドでズボンのポケットからハンカチを出して汗を拭くものだから、ハンカチ王子の愛称で一大旋風を巻き起こした。全国を沸かせた。その余波で神宮球場でも久々に大勢の観客を集めた。

この早稲田のエース斎藤祐樹とバッテリーを組む捕手は、細山田隆史（鹿児島城西高）といって我が輩の中学校野球部の後輩だ。小学校も後輩に当たるが、50歳も離れているものだから面識はない。この細山田は、平成19年春のリーグ戦首位打者でもあり、三連覇に貢献している。我が中学野球部がアマチュア野球の最高峰・東京六大学野球、なかでも強豪早稲田のレギュラー捕手を輩出していると聞いて、郷里の球友たちと大感激だった。

* 大学日本一 画期的な令和元年の春

<追補> その後のリーグ戦はどうなったか――。

明大はリーグ戦を制した。立大、早大、東大、慶大、法大に、明大はそれぞれ2勝ずつして勝点5を挙げ、完全優勝。リーグ戦のこれまでの各校の優勝回数は、早大45、法大45、明大40、慶大36、立大13、東大0。

6月10日から始まった第68回全日本大学野球選手権大会に東京六大学を代表して出場。全国から27代表が出場する大会で、順調に勝ち進んで優勝を果たした。38年ぶり6度目の大学日本一に輝いた。

令和元年の春季リーグ戦は、画期的であった。母校の野球部から優勝祝賀会の招待状が舞い込むとは、夢にも思っていなかった。「令和元年度 東京六大学野球春季リーグ戦・全日本大学野球選手権大会 優勝祝賀会」の招待状である。

7月28日17:30から「グランドプリンスホテル新高輪」飛天の間で開催され、折角の招待状だから、思い切って出席してみた。



会場は祝勝ムードに包まれ、晴れ晴れとした明るい雰囲気素晴らしい。喜びを隠せない善波監督に握手で迎えられ、学長、理事長らの祝辞、4斗樽（越後鶴亀・3樽）の鏡開きなど、セレモニーの後、エースの森下主将、竹田投手、西野捕手たちとも直に触れることができた。900名参集。会場に知合いの顔は誰一人として見なかったが、さすがにみんな明治、言葉にしない親近感がある。楽しく過ごした。大盛会であった。